

【学力向上フロンティアスクール用中間報告書様式】(中学校用)

都道府県名	山 口 県
-------	-------

学校の概要(平成15年4月現在)

学校名	岩国市立通津中学校					
学 年	1 年	2 年	3 年	特殊学級	計	教員数
学級数	2	2	2	0	6	13
生徒数	48	54	56	0	158	

研究の概要

1. 研究主題

基礎・基本の徹底を図り、確かな学力を培う指導の在り方
～学ぶ意欲を喚起させる指導の工夫を通して～

2. 研究内容と方法

(1) 実施学年・教科

授業研究プロジェクト

ア 少人数授業による実践
平成13年度から本校では、数学科・英語科を中心に個に応じた指導を図るため少人数授業を実施し、その授業形態や成果について研究を行ってきた。そのことを踏まえ、今年度も下記のような取組を行った。

(ア) 全学年・数学
数学科では、小学校からの積み上げの内容が多く、入学時から既に学力(計算能力)に差があった。その改善をめざし、より個に応じた指導を行うため。

(イ) 全学年・英語
英語科において、生徒一人一人をきめ細かに支援し、また少人数というグループの特性を生かした特色ある教育活動を展開するため。

イ 授業工夫グループによる実践
全学年・上記以外の教科
一斉授業の授業形態を生かした個に応じた指導を図るため。

「学習意欲」向上プロジェクト
全学年・全教科および一部の分掌
それぞれの生徒の実態を踏まえ、「学ぶ意欲」の向上をめざすため。

(2) 年次ごとの計画

平成15年度	<p>テーマ 学力向上のための指導体制・研究実践のための組織づくり (昨年度までの取組や少人数授業による成果等の深化)</p> <p>研究の見通し 上記の研究主題を解明するための研究仮説を次のように設定した。</p> <p>(研究仮説) 生徒一人一人の学習の到達度を把握し、その習熟度に配慮し、個に応じた指導やドリル学習等を進めることにより、基礎的・基本的内容が定着し、確かな学力の向上が図れるのではないかと。 基本的な生活習慣の定着や家庭学習の習慣化が深まれば、生徒の学びの構えが向上し、学ぶ意欲が高まるのではないかと。</p>
--------	---

これまでの本校の研究を継続・深化させながら、それぞれの教科・分掌・学年において共通理解を図り、校内研修の活性化を図りながら研究体制を確立し、各プロジェクトの研究実践を行う。また、1年次の中間まとめを行い、次年度の方向性を検討する。

研究の内容・方法

確かな学力の育成のための指導体制づくり

- ・教職員の意識調査の実施
- ・確かな学力についての共通理解
- ・学ぶ意欲についての共通理解
- ・生徒の実態把握、保護者等の意識調査の実施
- ・研究組織の見直し
- ・研究計画の作成（2年間）
- ・確かな学力を付けるために各教科・学年による学力についての共通理解
- ・授業時数確保のための共通理解
- ・学力リサーチ（学力の現状把握）の実施
全国的（C R T等）・全国的な評価テストや定期テストの分析・観察

個に応じた指導のための各教科による指導方法の工夫及び教材開発

- ・少人数授業による指導の工夫及び教材開発（数学科・英語科）
- ・個に応じた指導の工夫（各教科）
- ・課題解決的な学習やドリル学習等の工夫（各教科）
- ・評価方法の工夫改善（各教科）
- ・評価規準の改善（各教科）
- ・生徒による自己評価・相互評価・授業評価の工夫（各教科）
- ・指導と評価の一体化の工夫（各教科）

学ぶ意欲を喚起させる指導の工夫

ア 各学年部で取り組む内容

- ・「学びの構え」徹底の工夫
基本的生活習慣、学びの姿勢の見直しと指導方法の工夫
- ・「学びの環境」の整備、改善、工夫
- ・「家庭学習」の定着を図る工夫

イ 各分掌で取り組む内容

- ・地域・保護者との協力体制づくりの工夫
家庭学習の定着への啓発<学校だより・HP等の作成>（広報・情報管理）
- ・学びの達人の活用<通津中平成澤瀉塾とのリンク>（総合的な学習）
- ・読書指導<読解力・表現力をつける>（選択国語）
- ・生徒理解<生徒指導・教育相談>（教育相談）

ウ 各教科で取り組む内容

- ・授業改善（教材開発）・分かりやすい授業の工夫（全教科）
- ・表彰<チャレンジタイムでの全校表彰>（数学科・英語科）

平成
16
年度

テーマ

平成15年度の実践の工夫改善および深化

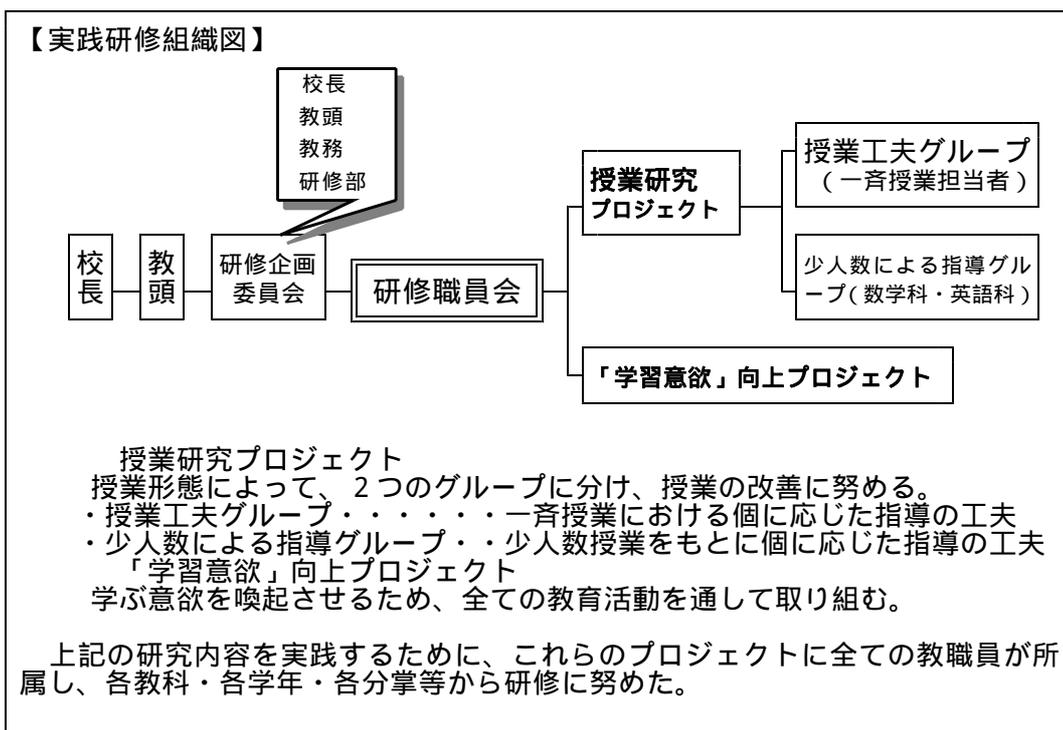
研究の見通し

各教科・各プロジェクト毎に平成15年度に実践した研究をもとに、その内容の精選や課題の検討・改善を行い、研究を深める。
2年間の研究のまとめを行い、その成果を広める。

研究の内容・方法

平成15年度の研究結果・課題を踏まえ、改善しながら実施する。
基本的には、平成15年度の内容や方法を継承する。

(3) 研究推進体制



平成15年度の研究成果及び今後の課題

1. 研究成果

(1) 確かな学力の育成のための指導体制づくり

今年度は、一年次ということもあり教職員の共通理解と指導体制づくりに研究の多くの時間を費やした。10回以上の校内研修会をもち、お互いの意見を交換することで、教科・学年や分掌を超えた共通理解を図り、「まず何かをやり始めよう」という意識が教員間に芽生えてきた。また、様々な調査・アンケート等を実施するなかで、生徒一人一人に目を向ける体制ができつつあるように思う。

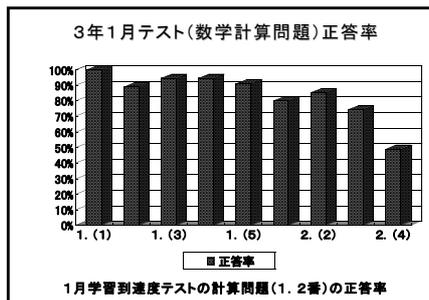
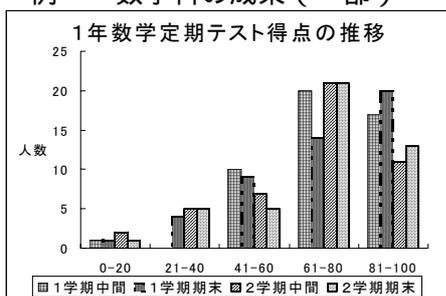
(2) 個に応じた指導のための各教科による指導方法の工夫及び教材開発

「全校体制で！」の合い言葉のもと、各教科で学力の向上をめざし、生徒の実態を踏まえた「基礎・基本」を確認し、その定着を図るための方策を考え実践してきた。年度当初より、各教科の主体的な取組が計画的に実践され、毎回の研究会でもそれぞれの教科の取組を報告し合うことができた。多くの教科で個に応じた指導を工夫し、各教科の基礎・基本と考える内容の定着を図るための教材や評価方法を工夫することにより、生徒一人一人の到達度に目を向ける実践ができた。生徒も評価される側から自分自身や授業を評価する立場となり、学習に対する取組に変容が現れてきている。また、「自分の意見を授業に生かしてもらえる」「自分をよく見てもらえる」という教師に対する信頼感も強まってきたように思われる。

研究仮説 にある「生徒一人一人の学習の到達度を把握し、その習熟度に配慮し、個に応じた指導やドリル学習等を進めること」への第一歩を踏み出すことができたように思う。今年度、各教科とも、定着のための小テスト・実技テストやドリル学習を多く取り入れている。生徒が自分の到達度をこまめに見極めることで、生徒の学習への意欲も高まってきたようである。

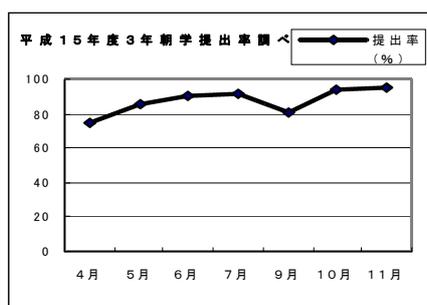
次のグラフは、数学科の1年生、3年生の定期テストでの得点の推移や基本的な計算問題の正答率を示したものである。どちらも数学があまり好きではないという生徒が多かった学年であったが、低位の生徒が減少し、また計算力もついてきていることが伺える。他教科においても、基礎・基本となるものを明確にし、その定着に向けて研究実践し、成果についても検証中である。

例 <数学科の成果(一部)>



(3) 「学ぶ意欲」を喚起させる指導の工夫

研究仮説 にある「基本的生活習慣」「家庭学習」「学びの構え」等を向上させることを目標に、各学年、分掌等で取り組んできた。各教科と同様に各学年、分掌でも全体会を受け、数回の部会をもち研修内容や方法等を話し合ってきた。その中で、各学年・分掌とも目の前の生徒の現状を踏まえ実践することで、学習意欲の向上や様々な力が身に付いてきたことを感じている。また今年度は全体的に見ても、生徒は落ち着いた生活を送っており、行事等への取組も熱心である。「学ぶ意欲」の喚起についての各取組の確かな数値的なデータはでないものの、生徒たちの各教科への取組姿勢も高まってきたと感じている。



左の資料は3年部においての「学びの構え」徹底の取組の成果である。学習委員が、毎日の朝学習の準備・点検・配布を行っている。点検はきびしく、欠席・遅刻・無記名提出は完全な提出と認めていない。クラスの生徒にもその日の提出状況を知らせている。1, 2年時には、忘れ物等が多く、提出物も怠る生徒が多かったが、委員の活動と一人一人の生徒の自覚によって、提出状況は次第に良好になっていることが伺える。また、朝学の提出だけでなく各教科の提出物状況も向上している。

<3年部の取組より>

学校便り、ホームページなどの活用により、保護者や地域の方々にも本校の取組や教職員の思いを伝え、家庭での取組を促す等の機会ももてたことも大きな成果である。保護者の方々から「とても役立っている」「学校の予定がわかりやすい」「子どもとの話題にしている」「進路関係の記事では身が引き締まる思いがする」等の感想もいただいている。

また、自由参観週間、参観日の実施や学校便り、ホームページなどの活用により、保護者や地域の方々にも本校の取組や教職員の思いを伝え、家庭での取組を促す等の機会ももてたことも大きな成果である。保護者の方々から「とても役立っている」「学校の予定がわかりやすい」「子どもとの話題にしている」「進路関係の記事では身が引き締まる思いがする」等の感想もいただいている。

2. 今後の課題

(1) 確かな学力の育成のための指導体制づくりの推進

意識調査や学力の現状把握が中心となり、それらの検討や見直しまで到達していないように思われる。

今年度の反省をもとに指導体制を見直し、さらに生徒に確かな学力が培われるように、全教職員で研究を進めることが必要である。研究に対する共通理解・共通実践が教育効果を高めると考える。

(2) 個に応じた指導のための各教科による指導方法の工夫及び教材開発の推進

各教科において、今年度の取組が「基礎的基本的内容の定着」にどうつながり、「確かな学力」がどの程度身についたかについて、その推移を検証することが今後の課題と考えている。

(3) 「学ぶ意欲」を喚起させる指導の工夫の推進

来年度は、今年度の取組を精選・改善し、更に学習意欲の向上を図るための工夫が必要であると考えている。

学力把握のための学校としての取組

1	教職員の意識調査の実施	(4月実施)
2	生徒の実態把握、保護者等の意識調査の実施	(7月実施)
3	学力リサーチ(学力の現状把握)の実施及び分析 全国的(CRT等)なテスト 山口県中学校教育研究会教科部会による 共通テスト等の全県的な評価テスト 定期テスト等	(4月・3月実施) (11月実施) (各学期実施)
4	各教科による単元や内容毎の生徒アンケートの実施	

フロンティアスクールとしての研究成果の普及

1	参観日の実施(少人数授業の実施)
2	学校公開の実施(自由参観週間の設定)
3	学校便りの発行(月1回)
4	ホームページの公開
5	公開校内研修会の実施 目的 授業研究をとおして本校職員および学力向上フロンティアスクール間の共通理解および小・中学校の連携を図る。 日時・場所 平成15年11月4日(月)実施 本校 対象者 本校職員、平田中学校(学力向上フロンティアスクール)の担当教員、通津小学校教員(小中交流)
6	小中交流会(通津小学校との授業公開)
7	地区協議会への参加及び中間報告 目的 学力向上フロンティアスクールの実践研究の成果を普及し、学力向上に向けた指導方法や指導体制の工夫改善に係る研究協議を行い、以て学校教育の充実に資する 日時・場所 平成16年1月19日(月) 岩国総合庁舎 対象者 管内小中学校関係者
8	年度末中間報告(1年次)の冊子の作成および配布

次の項目ごとに、該当する箇所をチェックすること。(複数チェック可)

- 【新規校・継続校】 15年度からの新規校 14年度からの継続校
- 【学校規模】 3学級以下 4～6学級
 7～9学級 10～12学級
 13～15学級 16学級以上
- 【指導体制】 少人数指導 T・Tによる指導
 その他
- 【研究教科】 国語 社会 数学 理科
 外国語 音楽 美術 技術・家庭
 保健体育 その他
- 【指導方法の工夫改善に関わる加配の有無】 有 無